【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和３年度学校評価 結果

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	唐津市立西唐津小学校

1　前年度 評価結果の概要	・基礎学力向上が本校の重点課題と考える。今年度も引き続き小中連携による学力向上推進地域指定事業の推進を通して、基礎学力を定着をもとにした主体的、対話的に学ぶ児童を目指していく。 ・前年度に引き続き、豊かな心の育成を重視し、定期的にアンケートを実施し、必要に応じて声かけを行いながら児童に寄り添っていく。 ・基礎的な体力向上をねらい、感染予防対策を講じたうえで日常の外遊び奨励を続けた。多くの児童が遊ぶ姿が見られた。また、「食」に関しても、栄養教諭を活用した食育指導を継続していく。 ・本校の教育課題改善に向けて「保護者・地域等との連携」を掲げている。そのために様々な体験的活動を仕組み、その教育効果を更に高めるために、地域人材・保護者との連携・協力を進める。
2　学校教育目標	**元気に楽しく学ぶ西唐津っ子　～西唐津小ONE TEAM～**
3　本年度の重点目標	①知：やる気⇒学力向上に積極的に取り組む。 ②徳：ほん気⇒思いやりの心を持ち「人・もの・こと」と関わる心を育てる。 ③体：げん気⇒学校における新しい生活様式を確立し、安全・安心な学校づくりに取組む。 ④保護者・地域等との連携を推進する。

4　重点取組内容・成果指標　　**中間評価**　　**5　最終評価**

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		非表示	非表示とする	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	〇授業の中で、自分の考えを書き、交流を通して、考えを広げたり深めたりする。 〇補充指導等を通して基礎・基本を確実に習得させる。	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上。	・定期的に校内研修会等で、マイプランの進捗状況を確認する。また、他の学年の状況を共有し、更なる取組の促進を図る。			A	・校内研修の総括として、全職員が成果と課題を共有できるように「研究のまとめ」を作成し活用できた。マイプランの成果指標の達成率は83%であり、数値目標の達成ができた。	A	・低学年の生活上の課題について、就学前機関にもっと伝える体制を構築するなど、校区内保育園と情報と課題を共有し、連携を進める必要がある。	教務 研究主任
	〇教師一人ひとりが、唐津市学力向上アクションプランに則った授業形態を実践し、児童の主体的・協働的な学び合いについて研究を深める。	〇学力向上アクションプランチェックシート（学校用）でチェック内容の評価で「A」の数を5つ以上。	・一人一人の教師の思いを大切にしながら、足並みを揃えるところは揃え、学校全体の教育力を高めていく。			A	・全職員が「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業研究を行い、授業改善を進めることができた。学力アクションプランチェックシートで「A」評価5つ以上はほぼ達成できた。	A	・今年度も地域が授業や学校の取組を参観する機会が無かったので、意識調査のデータや県調査の結果等を早めに学校ホームページ等で公開し、課題を共有する必要がある。	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	〇「友だちに対して思いやりの気持ちをもって優しくしていますか。」について、肯定的な回答をした児童が85%以上	・道徳教育の充実。 ・縦割り活動やボランティア活動を通してお互いを思いやる経験を積めるようにする。 ・児童の善い行いに気づいた教師が「ほめほめカード」を書いて掲示し、児童のよさを認める温かい雰囲気作りをする。 ・ふれあい道徳や通信による保護者との連携。			B	・縦割り活動やボランティア活動を計画的に実施し、お互いを思いやる経験をすることで児童の豊かな心が育ってきている。また、授業参観や通信を通して、児童の様子や学校での取り組みを保護者へ伝えることができた。アンケートでは毎月90%以上の児童が友だちへの優しさを意識した生活ができたと回答した。	B	・登下校中に「ありがとう」と感謝の気持ちを伝える児童が増えてきている。 ・休日や放課後に、地域でのコミュニケーションと感染症対策の両立が困難で、子どもたちの故郷を誇りに思う気持ちをどうやって育てていくか、検討の時期にきている。	人権・同和教育担当者 道徳推進教員
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実とともに「いじめの見逃し0」の体制構築	〇いじめアンケート，毎月初めの「西小アンケート」の結果をもとに早期発見といじめの見逃し0に努め，担任，生活主任，SC，SSWなどを中心に複数で連携して早急に解決に当たる。	・日常の児童観察や毎月の「よい子アンケート」等で、児童の状況・状態の変化に気付く。 ・気になる児童については職員同士で密に情報交換を行う。 ・必要に応じてSCやSSWとも連携し、よりよい方向性を見出す。			B	・毎月の「西小よい子アンケート」の結果を全職員で共有する「生活指導協議会」を定期的に開催し、SCやSSWと連携して情報の共有に努め、組織的に対応することができた。『いじめ「見逃し」ゼロ』方針が浸透できた。	A	・学校は、「西小よい子アンケート」をはじめあらゆる場面で児童の状況把握に努めている。 ・SNSの書き込み・誹謗中傷、コロナ感染症に関わる情報の詮索や偏見等、新たないじめに対応する体制を構築する必要がある。	教育相談担当者 生活部主任
	◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童（小学6年生）85%以上	・ 地域の人々との交流を通して学ぶ体験活動を各学年、年3回以上実施する。 ・キャリアパスポートを計画的に活用する。			B	・できる範囲で稲作や大豆作り、注連縄作り等、地域との交流活動を8回行い、児童は自己有用感を味わうことができた。キャリアパスポートは効果的な活用方法が見い出せなかった。	A	・地域の「青少年育成協議会」や「児童センター」などをもっと効果的に活用・連携し、児童に成就感達成感をもたせる交流活動を仕組む必要がある。	教頭 教務
●健康・体つくり	●運動習慣の改善や定着化	●外遊びや体力作りに関する児童用アンケートを実施し、その達成率を90%以上にする 〇運動前後における自己の健康管理の意識を確実にもたせる。	・ 体育委員会からの放送や担任からの呼びかけを行い、外遊びを奨励する。 ・体育学習の工夫(カリキュラムの工夫)を行い、体育の授業や体を動かすことが好きな児童を増やす。とともに、健康観察カードによる健康管理に努める。			A	・組織的に感染対策を徹底することで水泳学習を実施し、児童の体力向上とともに、日々の健康管理の重要性を認識させることができた。秋は、教室の換気に努め、屋外での活動を推奨し、縦割り遊びやマラソンタイムを充実させたことで、外遊びを好む児童90%を達成することができた。	B	・地域に外遊びができる場が少ないことに加えて、コロナ禍による不要不急の外出制限もあり、外遊びに関わる「禁止事項」が年々増えている。児童が地域で体を動かし運動する機会が減少していることを踏まえて学校・地域が一体となって体力づくりに努める必要がある。	保体部主任 給食指導担当者 栄養教諭 生活部安全教育担当者
	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「健康に食事は大切である」と考える児童90%以上	・早寝、早起き、朝ご飯の取り組みを家庭と連携して行い、望ましい食生活を身に付けさせる。 ・食生活アンケートの実施。			B	・健康に関する意識調査で、「食事は大切である」の回答が前回の99%から73%と大きく低下し目標到達に至らなかった。原因として「早寝早起き朝ごはん」の習慣化が不十分な児童が多く、朝食の必要性を認識していない児童が増えてきていることが考えられる。	B	・児童の遅刻が多いという課題解決のためにも「早ね早起き朝ごはん」の取組を、もっと家庭へ啓発する必要がある。	給食指導担当者 栄養教諭
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・毎月第3週目をノー残業推進週間とし、職員に積極的に呼び掛ける。 ・校務サーバーを整理し、これまでの文書データを有効的に活用できるようにする。 ・校務を整理し、チームとして対応できるようにする。			B	・職員の時間外勤務の月平均は徐々に減少し、改善されている。月45時間未満の職員数も前回の80%から87.5%と増え、勤務時間を意識した働き方へ改善されている。 ・分掌事務の効率化・組織化が不十分で、今後の課題として挙げられる。	A	・コロナ禍で授業参観等が制限される中で「学級通信」をもっと頻繁に出してほしいという意見も多々あるが、学級担任に過度な負担とならない程度で、学校と家庭の新たな連携体制の整備を期待する。	教頭

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		非表示	非表示とする。	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
〇特別支援教育の推進	〇（学校独自重点取組・任意） すべての子どもたちにとってのまなびやすい環境を作る。	〇（学校独自成果指標・任意） 〇各学期初めに、教室環境を整える。 〇2学期以降に、特殊音節などのアセスメントを行い、必要な支援につなげていく。	・各教室のまなびやすい環境作りを進める。特に特別支援学級においては、仕切り板の活用など個に応じた場の設定を行う。 ・アセスメントをもとに、必要な支援につなげていく。			A	・特別支援学級や通常学級では、児童の持つ困り感が大きく違う場合が多かったが、それぞれの児童に応じた支援や指導を行うことができた。また、特別支援教育に関する研修や気になる子研等を通して、特別支援教育や児童についての理解を深めることができた。	A	・特別支援教育への理解が進んでいる。特別支援学級の児童への言葉かけがとても優しい。 ・特別に配慮を要する児童に対する学校の情報共有が適切に行われている。	特別支援教育 コーディネーター
〇地域連携・幼小中連携	〇小、中連携しての授業づくりの実践や指導方法の交流により基礎学力を向上させる。	〇「授業づくり1・2・3」を活用した主体的・対話的な学びを取り入れた授業を実践したと答えた教員80%以上。	・中学校との連携は9年間というスパンを見据えながら計画を立て、内容の充実も図っていく。 ・年3回以上、小中交流会を実施し、「授業づくり1・2・3」を活用した主体的・対話的な学びを取り入れた授業を公開する。			B	・感染拡大により交流授業や交流会等の取組が十分できなかったが、小中9年間を見通した工夫を「24の日」を通して家庭に啓発し、意識して取り組む家庭が増えた。 ・学力向上に関して小中連携を強化する計画であったが、コロナ禍で活発な交流が難しくなった現状、ICTの活用を充実させて小中連携を図る必要がある。、	B	・小中連携に加え、幼保小連携のさらなる充実が必要である。 ・校内取組の6年間を見通した学力向上の取組は進んできたが、小中連携として9年間を見通した取組にさらなる工夫が必要である。	教務　教頭

●・・・県共通　〇・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・全校で足並みを揃えた組織的な学力向上対策により、児童の学年が進んでも見通しを持って授業を受け、ノート作りができるようになってきている。さらなる実践を積み重ねて、「主体的、対話的で深い学び」の視点で授業改善に努める。 ・児童の心の交流を図る「縦割り活動やほめほめカード」等の全校的な取り組みにより、学校目標「元気に楽しく学ぶ」ことができている。次年度も異学年交流や学年間交流を活発化させ、児童の豊かな心の育成に努める。 ・薬剤師による防煙教室と薬物乱用防止教室、学校歯科医と連携した感染症対策、栄養教諭と連携した食育の取組など、人的物的資源を活用し健康安全教育を充実させることができた。次年度も、地域や学校内外のチーム学校の人材を的確に組み合わせ、教育効果を高める。 ・ウィズコロナの視点で、感染症対策を的確に講じたうえで、ICTを活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる取組を推進し、「学びの継続・発展」を図る。